

G5

# 『伊勢物語』の語り手に迫る

安藤 栄

## 要旨

『伊勢物語』の章段の最後の語り手の言葉が読み手に与える効果について研究したところ、それらには男が同一人物であることを示す、男が和歌の名手であったことを強調するという2つの効果があるのではないかという仮説が生まれた。

## 1. 目的

章段の最後の語り手の言葉が読み手の受ける印象にどのような効果をもたらすかを知ること。

## 2. 予備調査

- ① 『伊勢物語』を章段ごと独立したものとして読み、章段の最後の語り手の言葉があるときとないときそれぞれで感じたことを表にまとめる。
- ② 『伊勢物語』を物語の流れの中で読み、①とのちがいを比較する。

## 3. 結果

表1 予備調査① 結果

登場人物の印象が変わった段（段）	登場人物の印象が変わらなかった段（段）
初・10・15・33	
39・40・63・76	50・75・90・93
77・87・96・103	

表2 予備調査② 結果

登場人物の印象が変わった段（段）	登場人物の印象が変わらなかった段（段）
39・96	初・10・15・33 40・50・63・75・ 76・77・87 90・93・103

予備調査①・②のちがい（第10段の場合）  
内容

花嫁候補の母から贈られてきた和歌に男が好意的に返歌する。

予備調査①で受けた印象

男は一途なタイプである。

↓ 「なほかかることなむやまざりける。」

男が一途なタイプであるとは言えない。

※変化あり

予備調査②で受けた印象

男の言葉に説得力がない。

※変化なし

## 4. 考察

各章段を独立したものとして読んだときよりも、物語の流れの中で読んだときの方が印象が変化した段が大幅に減少した。章段の最後の語り手の言葉は男が同一人物であることを示そうとしたのではないかと考えられる。

男以外の和歌を平凡であると表現していることから、『伊勢物語』の語り手は男が和歌の名手であることを強調したかったのではないかと考えられる。

## 5. 仮説

章段の最後の語り手の言葉は

- ① 男が同一人物であることを示す
  - ② 男が和歌の名手であったことを強調する
- という効果を持っているのではないか。

## 6. 今後の方向

仮説①・②についての研究を進める。

## 7. 参考文献

- ・ 渡辺実 (1976) 『新潮古典集成 (第二回) 伊勢物語』 新潮社
- ・ 片桐洋一 高橋正治 清水好子 (1972) 『日本古典全集8 竹取物語 大和物語 平中物語』 小学館